

襟

オシップ・ディモフ Ossip Dymoff

森鷗外訳

青空文庫

襟二つであった。高い立襟で、頸の太さの番号は三十九号であった。セルウブル出して買った一ダズンの残りであった。それがたったこの二つだけ残っていて、そのお蔭でおれは明日死ななくてはならない。

あの襟の事を悪くは言いたくない。上等のオランダ麻で拵こしらえた、いい襟であった。オランダと云うだけは確かには分からないが、番頭は確かにそう云った。ベルリンへ来てからは、やす廉いので一度に二ダズン買った。あの日の事はまだよく覚えている。朝応用美術品陳列館へ行った。それから水族館へ行って両棲動物を見た。ラインゴルドで午食をして、ヨスチイで珈琲コオファイを飲んで、なんにするという思案もなく、赤い薔薇ばらのブケエを買って、その外にも鹿の角を二組、コブレンツの名所絵のある画葉書を百枚買った。そのあとでエルトハイムに寄って新しい襟を買ったのであった。

晩には方々歩いたつけ。珈琲店はウイクトリアとパウエルとへ行った。それから黒シヤアノ猫アルやリンデンヤパツサアジユ拔パツサアジユ裏パツサアジユなんぞの寄席にちよいちよい這入はいって覗いて見た。その外どこかへ行つたが、あとは忘れた。あの時は新しく買った分の襟を一つしていた。リツシユに這入かぶつたとき、大きな帽子を被かぶつた別品さんが、おれの事を「あなたロシアの侯爵でしょ

う」と云つて、「あなたにお目に掛かった記念にしますから、二十マルクを一つ下さいな」と云つたつけ。

ホテルに帰つたのは、午前六時であつた。自動車のテクサメエトルを見たら五の所に針が行つていた。それをどう云うものだか、シヨッフヨオルの先生が十二の所へそつと廻した。なんだか面倒になりそうだから、おれは十五に相当する金をやった。部屋に這入つて見ると、机の上に鹿の角や花束が載つていて、その傍に脱^{はず}して置いて出た古襟があつた。窓を開けて、襟を外へ投げた。それから着物を脱いで横になつた。しかし今一つ例の七ルウブルの一ダズンの中の古襟のあつたことを思い出したから、すぐに起きて、それを捜し出して、これも窓から外へ投げた。大きな帽子を被つた両棲動物奴^めがうるさく付き纏つて、おれの膝に腰を掛けて、「テクサメエトルを下さいな」なんと云う。そのうち寐^{ねい}入つた。翌朝と云いたいだが、実際もう朝ではなかつた。おれは起きて出掛けた。今日は議会を見に行くはずである。もうすぐにパライへ立つ予定なのだから、なるだけ急いでベルリンの見物をしてしまわなくてはならないのである。ホテルを出ようとすると、金モオルの附いた帽子を被つている門番が、帽を脱いで、おれにうやうやしく小さい包みを渡した。

「なんだい」とおれは問うた。

「昨日侯爵のお落しになった襟でございます。」こいつまでおれの事を侯爵だと云つて
 いる。

おれはいい加減に口をもぐつかせて謝した。

「町の掃除人が持つて参ったのでございます。その男の妻が拾ったそうでございます。四十
 ペンニヒ頂戴いたしたいと申しおりました。」

「そんなら出しておいてください。あとで一しよに勘定して貰うから。」

襟は丁寧に包んで、紐でしっかり縛つてある。おれはそれを提げて、来合せた電車に乗
 つて、二分間ほどすると下りた。

「旦那。お忘れ物が。」車掌があとからこう云つた。

おれは聞えない振りをして、ずんずん歩いた。そうすると大騒ぎになった。電車に乗つ
 ていた連中が総立ちになる。二人はおれを追い掛けに飛んで下りる。一人は車掌に談判す
 る。今二人は運転手に談判する。車の屋根に乗っている連中は、蝙蝠傘こうちりがさや帽やハンケチ
 を振つておれを呼ぶ。反対の方角から来た電車も留まって、その中でも大騒ぎが始まる。
 ひどく肥満した土地の先生らしいのが、逆上して真赤になって、おれに追い附いた。手
 に例の包みを提げている。おれは丁寧に礼を言った。肥満した先生は名刺をくれておれと

握手した。おれも名刺を献上した。見物一同大満足の体で、おれの顔を見てにこにこしている。両方の電車が動き出す。これで交通の障しょうがい碍がいがやっと除かれたのである。おれはこの出来事のために余程興奮して来たので、議会に行くことはよしにした。ぶらぶら散歩して、三十分もたつてから、ちようど歩いてきたスプレエ川の岸から、例の包を川へ投げた。あたりを見廻しても人つ子一人いない。

晩までは安心して所しよしよ々をぶらついていた。のん気で午食も旨く食った。襟を棄ててから、もう四時間たつている。まさか襟がさきへ帰つてはいまいとは思いながら、少しびくびくものでホテルへ帰った。さも忙しいという風をしてホテルの門を通り掛かった。門番が引き留めた。そしてうやうやしく一つの包みを渡すのである。同じ紙で包んで、同じ紐で縛つてある。おれははつと思うと、がっかりしてその椅子に倒れ掛かった。ボオイが水を一ぱい持つて来てくれた。

門番がこう云った。「いや、大した手数でございましたそうです。しかしまあ、万事無事に済みまして結構でございました。すぐに見付ければよろしいのでございますが、もうお落しになってから約八分たつていたそうで、すっかり水を含みまして、沈みかかっていたそうでございます。水上警察がそれを見付けて、すぐに非常号音を鳴らします。すぐに

電話で潜水夫を呼び寄せます。無論同時に秘密警察署へも報告をいたしまして、私立探偵事務所二箇所へ知らせましたそうで。」

「なるほど。シエロック・ホルムス先生に知らせたのだね。」

門番はおれの顔を見た。その見かたは慇懃いんぎんではあるが、変に思っているという見かたであった。そしてボオイに合図をすると、ボオイがもう一杯水を持って来てくれた。

門番は話のあとをする。「潜水夫は一時間と三十分掛かって、包みを見付けたそうでございます。その間に秘密警察署の手で、今朝から誰があの川筋を通ったということを探りました。ベルリン中のホテルへ電話で問い合されました。ロシア人で宿泊しているものはないかと申すことで。」

「なぜロシア人というのだろう」と、おれは切れぎれに云った。

「襟に商標が押ししてございまして、それがロシアの商店ので。」

おれは椅子から立ち上がった。

「もういいもういい。そこで幾ら立て替えておいてくれたのかい。」

「六百マルクでございます。秘密警察署の方は官吏でございますから、報酬は取りませんが、私立探偵事務所の方がございますので。どうぞ悪しからず。それから潜水夫がお心付

けを戴きたいと申しました。」

おれはすっかり気色を悪くして、もう今晚は駄目だと思った。もうなんにもすまいと思つて、ただ町をぶらついていた。手には例の癩しやくに障る包みを提げている。二三度そつと落してみた。すぐに誰かが拾つて、にこにこした顔をしておれに渡してくれる。おれは方々見廻した。どこかに穴か、溝か、畠あきか、明家あきやがありはしないかと思つたのである。そんな物は生憎ない。どこを見ても綺麗に掃除がしてある。片付けてある。家がきちんと並べて立ててある。およそ十二キロメートルほど歩いて、自動車を雇つてホテルへ帰つた。襟の包みは丁寧に自動車の腰掛の下へしまつておいて下りた。おれだつて、あしたはきつと戻つて来るとは知つている。ホテルへ乗つて帰る車の中に物を置けば、それが翌日は帰つて来るということが分からないのではない。とにかく今夜一晩だけでもあの包みなしに安眠したいと思つたのである。明朝になつたなら、またどうかしようというのであつた。しかしそれは画餅がへいになつた。おれはどうとう包みと一しよに寝た。十二キロメートル歩いたあとだからおれは随分くたびれていて、すぐ寝入つた。そうすると間もなく戸を叩くものがある。戸口から手が覗く。袖の金線でボオイだということが分かる。その手は包みを提げているのである。おれは大熱になつた。おれの頭から鹿の角が生える。誰やらあとから

追い掛ける。大きな帽子を被った潜水夫がおれの膝に腰を掛ける。

もうパリイへ行こうと思うことなんぞはおれの頭に無い。差し当りこの包みをどうにか処分しなくてはならない。どうか大地震でもあつてくれればいいと思う。何もベルリンだつて、地震が揺つてならないはずはない。それからこういう事も思った。動物園へ行つて、河馬の咽へあの包みを入れてやろうかと云うのである。しかし奴が吐き出すかも知れないと思つて、途中で動物園に行くことを廃めにして料理店へ這入つてしまった。幸におれは一工夫して、これならばと一縷いちるの希望を繫いだ。夜、ホテルでそつと襟を出して、例の商標を剥がした。戸を締め切つて窓掛おろを卸して、まるで贗金を作るといふ風でこの為事しごとをしたのである。

翌朝国会議事堂へ行つた。その様子は少しおれを失望させた。卓と腰掛とが半圈状に据え付けてある。あまり国のと違つていない、議長席がある。鐸ベルがある。水を入れた瓶がある。そこらも国のと違つていない。おれは右党の席を一しよう懸命注意して見た。

そしてこう決心した。「どうもこいつの方が信用が置きそうだ。この卓や腰掛が似ているように、ここに来て据わる先生達が似ているなら、おれは襟に再会することは断じて無かるう。」

こう思つて、あたりを見廻わして、時分を見計らつて、手早く例の包みを極右党の卓の中にしまった。

そこでおれは安心した。しかし念には念を入れるがいいと思つて、ホテルを換えた。勘定は大分嵩張かさばつていた。なぜと云うに、宿料、朝食代、給仕の賃銀なんぞの外に、いろいろな筆数が附いている。町の掃除人の妻にやった心付け、潜水夫にやった酒手、私立探偵事務所の費用なんぞである。

引き越したホテルはベルリン市のまるであべこべの方角にある。宿帳へは偽名をして附けた。なんでもホテルではおれを探偵だと思つたらしい。出入をするたびに、ホテルの外に立っている巡査が敬礼をする。

翌日は休日である。議会は休みのはずである。その翌日から予算が日程に上ぼつていて、大分盛んな議論があるらしい。その晩は無事に済んだ。その次の日の午前も無事に済んだ。ところが午後になると、議会から使が来て、大きなブックを出して、それに受取を書き込ませた。

門番があつけに取られたような風をして、両手の指を組み合せて、こう云つた。「どうでも大臣か何かにおなりになるのではございますまいか。わたくしは議事堂に心安いもの

を持つています。食堂の給仕をいたしております。もしこれから何か御用がおりなされるなら、その男をお使い下さるようお願い申します。確かな男でございます。」

おれの考えは少々違っていた。果せるかな、使は包みを一つ取り出して、それをおれに渡すのである。

門番はこう云った。「勲章でございましょう。銀の勲章でございましょう。これから二つ目の横町を右へお曲がりになる所の角へお持ちになりますと。」

「なんだい、それは。その角に持つて行つてどうするのだい。」

「質店でございます。勲章なら、すぐに十マルクは御用立てます。官立典物所なんぞへお持ちになつたつて、あそこではせいぜい六マルクしかよこしません。なかなかずるうございすから。」

ところがおれの受け取つたのは、勲章でもなければ、大臣の辞令でもない。例の襟である。極右党の先生が御丁寧にも札を附けてくれた。こんな事が書いてある。「露国の名誉ある貴族たる閣下に、御遺失なされ候物品を返上致す機会を得候は、拙者の最も光栄とする所に有これあせうろうなおしよらいとも之候。猶将来共。」あとは読んでも見なかつた。

おれはホテルを出て、沈鬱して歩いてきた。頼みに思つた極右党はやはり頼み甲斐のな

い男であった。さてこれからどうしよう。なんだっておれはロシアを出て来たのだろう。今さら後悔しても駄目である。幸にも国にはまだ憲法が無い。その代りには、どこへ行つて見ても、穴くらい幾らでもある。溝も幾らもある。よしや襟飾を棄てる所は無いにしても、襟くらい棄てる所は幾らもある。

日が暮れた。熱が出て、悪寒おかんがする。幻覚が起る。向うから来る女が口を開く。おれは好色家の感じのような感じで、あの口の中へおれの包みを入れてみたいと思った。巡査が立っている。あの兜を脱がせて、その中へおれの包みを入れたらよかろうと思う。紐をからんでいる手の指が燃えるような心持がする。包みの重りが幾キログラムかありそうな心持がする。ああ。恋しきロシアよ。あそこには潜水夫はいない。町にも掃除人はいない。秘密警察署はあつても、外の用をしている。極右党も外国の侯爵に紙包みを返してやろうなんぞとは思わない。いわんやおれは侯爵でもなんでもないのである。ああ。ロシアよ。おれは余りに愛国の情が激発して頭がぐらついたので、その塀に寄り掛かって自ら支えた。

「これは、あなた、どうなさいましたのですか。御気分でもお悪いのですか。やあ、ロシアの侯爵閣下ではございせんか。」

おれは身を旋^{めぐる}らしてその男を見た。おれの前に立^たっているのは、肥満した、赤い顔の独^ド逸^イ人である。こないだ電車から飛び下りておれのわざと忘れて置いた包みを持って来てくられて、自分の名刺をくれた男である。

おれはそいつのふくらんだ腹を見て、ポツケットに入れていたナイフを出してそのナイフに付いていた十二本の刃を十二本ともそいつの腹へずぶりと刺した。腹の持主はぐっとも言わない。日本人のやる腹切りのようなわけだ。そしてぐいと引き廻して、腹の中へ包みを入れた。包みの中には例の襟が這入っているのである。三十九号の立襟である。一ダズン七ルウブルの中の二つである。それから腹の創口をピンで留めて、ハンケチで手を拭いて、その場を立ち退いた。誰もおれを見たものはない。おれは口笛を吹いて歩き出した。その晩はよく寝た。子供のように愉快的な夢を見て寝た。翌朝目を覚まして、鼻歌を歌いながら、起きて、鼻歌を歌いながら、顔を洗って、朝食を食った。なんだか年を逆さに取ったような心持がしている。おれは「巴^{パリイ}里へ行く汽車は何時に出るか」と問うてみた。

停車場へ出掛けた。首尾よく不喫烟室に乗り込むまではよかったが、おれはそこで捕縛せられた。

おれは五時間の予審を受けた。何もかも白状した。しかし裁判官達には、おれがなぜそ

んな事をしたか分からない。

「襟だつて価のある物品ではありませんか」と、裁判官も検事も云うのである。

「あいつはわたくしを滅亡させたのです。わたくしの生涯を破壊したのです。あいつが最初電車から飛び下りて、わたくしを追いかけて、あの包みを渡しさえしなかつたら。」

「しかし誰でもあの男の場合に出合つたら、あの男と同じ行為に出でたでしょう。どうも外に為様しやうはないじやありませんか。一体被告の申立ては法廷を嘲弄しているものと認めます」と、裁判官達は云つた。

おれは死刑を宣告せられた。それから法廷を侮辱した科とがによって、同時に罰金二十マルクに処せられた。

「被告の所有者たる襟は没収する限りでないから、一応被告に下げ渡します」と、裁判長が云つた。「あの差押えた品を渡せ」と云うや否や、押おうてい丁はおれに例の紙包みを持って来て渡した。

その時おれは氣を失つた。それから醒覺したのは、監獄の部屋の中であつた。夜である。おれの傍には卓があつて、その上に襟の包みが載っている。

明日はおれは処刑を受ける。おれはヨオロッパのために死ぬる。ヨオロッパの平和のた

めに死ぬる。国家の行政のために死ぬる。文化のために死ぬる。

襟は遺言をもつて検事に贈る。どうとも勝手にするがいい。

故郷を離れて死ぬるのはせつない。涙が翻こぼれて、もうあとは書けない。さらばよ。我が
ロシア。

附言。本文中二箇所の字句を改かい刪せんしてある。これは諷刺の意を誤解せられては差支えるので、故意に原文に従わなかったのである。誤訳ではない。

青空文庫情報

底本：「諸国物語（上）」ちくま文庫、筑摩書房

1991（平成3）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鷗外全集」岩波書店

1971（昭和46）年11月～1975（昭和50）年6月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

襟

オシップ・ディモフ Ossip Dymoff

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>